

韓国におけるオープンソース・ソフトウェア 記録システムの普及活動

〈記録文化〉を浸透させるために [1]

Beginning to Disseminate Records Systems Based on Open Source Software for
Popularization of Records Culture in Korea : AtoM, Archivematica, Omeka and WordPress



任眞嬉(イム・ジンヒ) | Jin-Hee Yim

[訳 | translation] 元ナミ | Nami Won

金甫榮 | Boyoung Kim

| 韓国 | 記録システム | オープンソース・ソフトウェア | AtoM | セウォル号事故 |
South Korea / records systems / open source software / AtoM / the SEWOL ferry disaster

韓国では、1999年「公共機関の記録物管理に関する法律」の制定と相まって電子政府が進められ、多くの公共記録が電子文書で作成されるようになった。この法律は2007年に「公共記録物の管理に関する法律」と改正され、電子記録管理システムを中心に更新された。公共部門の記録管理の発展とともに、民間分野におけるアーカイブズへの関心も高まり、さまざまな民間アーカイブズが構築されつつあるが、その過程で公共記録の管理方法やツールをそのまま適用することは難しいという学問的、実践的課題が提起された。特に記録システムの構築には多くの課題が存在している。本講演では、その解決策の一つとして「AtoM」や「Archivematica」「Omeka」などのオープンソース・ソフトウェアを利用して構築された記録システム「人間と記憶のアーカイブ」、「マウル・アーカイブ」「セウォル号アーカイブ」の事例を紹介する。このような民間アーカイブズのための記録システムの普及活動は、記録保存の重要性に対する共感を広げ、記録文化を浸透させることに大きく貢献している。

In South Korea, many electronic public records were created when the Public Records and Archives Management Act went into effect in 1999. This law was updated in 2007 to focus on electronic records management system. With the development of records management in the public sector, interest in creating archives increased in the private sector. As a result, various private archives have recently been built. However, many challenges exist in directly applying the methods and tools of public records management. In particular, the construction of a records management system is hindered by numerous difficulties. Open-source software can help resolve some of these issues. The "Human and Memory Archives," "Maeul Archives," and "Sewolho Archives" are examples of archives that use open-source software such as "AtoM," "Archivematica," and "Omeka." Activities aimed at disseminating the records management system for use by private archives contribute greatly toward expanding people's understanding of the importance of record keeping.

はじめに

こんにちは。韓国から参りました、任眞嬉(イム・ジンヒ)と申します。先ほどご紹介をいただきましたが、私は大学と大学院修士課程で、コンピュータ工学を専攻しました。15年ほどプログラミング、データベース設計、ITコンサルティングをしていますが、2004年から記録管理システムの仕事を始めました。記録管理に関わる仕事を始めてから、今年で満10年になります。これまで、主に公共部門の電子記録管理システムを作る過程に参加してきました。

しかし最近では、公共部門の記録管理よりも一般の人たちの生活をアーカイブングすること、共同体の記録や個人記録を管理することに最も関心を持っています。記録管理を盛んにするためには、「記録文化」の普及が必要だと考えたからです。そのため、去年から記録文化普及のための具体的な実践を始めました。これまで私が実践してきた内容を本日、皆さんと共有したいと思います。

本日の報告テーマは、「韓国におけるオープンソース・ソフトウェア記録システムの普及活動——〈記録文化〉を浸透させるために」です。まず、皆さんに情報を提供するため、韓国の公共機関における記録管理システムについて、簡単に紹介したいと思います。

1 —— オープンソース・ソフトウェア記録システム：議論の背景

韓国では、1999年に初めて「公共機関の記録物管理に関する法律」を制定しました。この時期韓国では、電子政府が強力に推進され、ほとんどの公共記録が電子文書で作成されるようになりました。2004年には公共機関の記録管理のために、「資料館システム」というものが導入されました。「資料館システム」の開発目標は、記録物管理の電算システムを確立し、システムを標準化し、「公共機関の記録物管理に関する法律」を円滑に施行することによって、電子政府実現の一翼を担おうとするものでした。

2007年には「資料館システム」に代わって、新しい記録管理システムが導入されました。電子記録の真正性確保と、長期保存の可能性を備えたシステムです。この時点で法律も「公共記録物の管理に関する法律」と改正されました。法律の内容も、電子記録管理システムを中心に変更されました。公共部門の記録管理が発展していく中で、さまざまな民間分野においてもアーカイブズに対する関心が高まっていました。個人の日常、共同体の活動、文化・芸術など、さまざまなテーマに基づいた民間アーカイブズが構築される必要があるという、共通認識が形成されていきました。これによって韓国の記録学界は、公共部門から民間へと記録管理の地平を拡大するための努力を始めました。

1 —— 2014年6月21日(土)14:30-17:00、
学習院大学中央教育研究棟303教室
で行われた講演。参加者は、37名であっ
た。当日の通訳およびスライドの翻訳、テ
ープ起こしは元ナミ(博士後期課程3年)、金
南榮(博士前期課程2年)が分担して行った。



例えば、2013年11月の第5回「全国記録人大会」では、「記録管理、地平の拡大」というテーマで、民間アーカイブズの構築事例を取り上げました。その間、早いスピードで発展を繰り返してきた韓国記録管理の世界が、公共部門を越えて民間分野にまで拡大されることによって、さまざまな学問的課題、実践的課題が提起されました。公共記録の管理方法やツールを、民間アーカイブズの管理にそのまま適用するのは難しいという問題があったからです。

民間アーカイブズの実務者たちは、各自が現場で抱える問題を共有するために、2013年12月から「マニユスクリプト・キャンプ」という集会を始めました。民間アーカイブズの構築にあたって困難を生じる部分の一つが、まさに「システム」の問題でした。

民間アーカイブズでは、システムを構築するにあたって、さまざまな困難に直面していました。サーバーの確保やソフトウェア購入費用などは、民間アーカイブズにとって大きな負担でした。システムを構築するとしても、持続的に維持することが可能なのかという問題がありました。また、記録システムをまったく扱ったことのないアーキビストが、備えていなければならない機能要件を整理することは不可能でした。私は多くの民間アーカイブズをコンサルティングする中で、このようなシステムの問題の存在を知ることができました。

結局、私は2013年春、一つの決心をします。オープンソース・ソフトウェアを利用して記録システムを構築してみようということでした。そうすればまず、システムの構築費用は安く済むでしょう。そして、多くのアーカイブズが共通のオープンソース・ソフトウェアを使うことによって、技術的な問題を共同で解決していくことも可能となります。さらに、アーキビストたちがシステムを経験することによって、今後、高度なシステムを設計する能力を身につけることもできるでしょう。

私は、民間アーカイブズにオープンソースで構築した記録システムを普及させることを決めました。去年からICAの「AtoM」(アトム)をはじめとする、オープンソース・ソフトウェアを発掘し、テストする作業を開始しました。もちろん、この作業は私ひとりでは不可能です。博士課程の授業でも一緒に勉強し、社団法人・韓国国家記録研究院の内部プロジェクトとしても取り組んでいます。韓国国家記録研究院の院長が金翼漢(キム・イッカク)教授であり、副院長が私です。

オープンソース・ソフトウェアというのは、本体にあたる「ソース」を公開することを示します。ソフトウェアを開発したグローバル企業が市場を独占することに対する、「反撃の武器」として登場しました。オープンソース・ソフトウェアが増え、ユーザたちはさまざまな選択肢を持つことができるようになりました。ソフトウェアの研究者、開発者には立派な先生がいたり、教材として活用されることもあります。オープンソース・ソフトウェアは韓国ソフトウェアの発展にも良い材料となっています。アーキビストたちは無料で使うことができるため、システムの構築費用を最小限に抑えることができます。また、各アーカイブズの特性に適合するように、カスタマイズして使

うこともできます。したがって、システムの構築予算がとれず、適合したシステムを導入する自信が持てない民間アーカイブズは、経験のためにもオープンソース・ソフトウェアを使ってみることをお勧めします。

2 —— AtoM 記録システム

私はオープンソース・ソフトウェアとして、記録の登録および記述のために「AtoM」を、長期保存のために「Archivematica」を、基本目録の管理およびオンライン展示のために「Omeka」を選択し、記録システム構築に向けた研究をしています。本日は「AtoM」について詳しく紹介し、オープンソース・ソフトウェアだけを使用して記録システムを構築した事例を紹介します。

まず「AtoM」について紹介します。「AtoM」は、「Access to Memory」の略語です。ICA(International Council on Archives / 国際公文書館会議)とArtefactualという企業が協力して開発した、ウェブ・ベースの記録システムです。無料配布のオープンソース・ソフトウェアであり、さまざまな国で利用できるよう、多国語に対応しています。2008年7月に1.0 Betaバージョンが開発され、2013年末に2.0バージョンが公開されました。2013年現在、世界で250余りの機関が「AtoM」を使用しています。

「AtoM」のシステムとしての特徴について検討します。第一に、ウェブ・ベースであるということです。ですから、個々のPCにプログラムをインストールする必要がありません。第二に、オープンソースなので誰でも無料で使うことができます。第三に、ICAが定めた記録記述標準によってメタデータを入力することができます。第四に、翻訳を提供すれば自国の言語でも使用可能となります。第五に、さまざまなデジタル記録物を管理・公開することができます。

「AtoM」のユーザは、管理者と一般ユーザに分けられます。どちらもWebブラウザを通じてアクセスすることになります。「AtoM」のWebサーバーでは、「Apache」と「nginx」という、2つのオープンソース・ソフトウェアを搭載することができます。データベース管理システムも「MySQL」というオープンソース・ソフトウェアが使われます。「AtoM」は、他のシステムとの互換性を維持するため、エクスポート/インポートの機能を備えています。メタデータは、ダブリンコア、EAD、MODSなどまでカバーしています。記録記述規則の標準テンプレートを選択して使うこともできます。典拠レコードの管理や、所蔵先についての記述も可能です。管理者機能を使って、各アーカイブズの特性に合わせたカスタマイズも可能です。メニューを作成、削除、移動する機能もあります。レイアウト編集、特定フィールドを隠す機能、IPアドレスによって受信範囲を制限する機能も備えています。「AtoM」は、Windows系列よりLinux系列のOSで最もよく動作す

るというのが私の経験からわかったことです。

3 —— AtoM構築事例：「人間と記憶のアーカイブ」

それではこれから、「AtoM」とオープンソース・ソフトウェアのみを使用して構築した、アーカイブズ・システムの事例をご紹介します。それは「人間と記憶のアーカイブ」です。「人間と記憶のアーカイブ」は2013年7月、社団法人・韓国国家記録研究院、明知大学校記録情報科学専門大学院、デジタルアーカイビング研究所が共同で設立しました。

まず、アーカイブズの収集範囲とコレクションをご紹介します。「人間と記憶のアーカイブ」は、主に寄贈と企画イベントを通じて記録を収集しています。現在、「日常コレクション」「明知大コレクション」「記録人コレクション」の3つのアーカイブズを構築しています。

「日常コレクション」では、一般の人たちの生活に関するすべての記録が収集対象となります。「明知大コレクション」には、毎学期の記録情報科学専門大学院の授業とイベント記録を収集しています。「記録人コレクション」は、記録専門家たちから個人記録物の寄贈を受ける形で収集しています。

これは「日常コレクション」記録の事例です（スライド5）。この手紙はイ・チャンユンさんが書いたものです。韓国の20代男性たちは、義務として兵役に就くこととなります。30年余り前、軍隊に入隊したチャンユンさんは、入隊直後に私服を脱いで訓練服に着替えます。脱いだ私服は、実家に小包みで送り返されます。軍隊に入隊した息子の私服を受け取ったすべての韓国の母親たちは、息子を思いながら小包みを抱きしめ、大声で泣くこともあります。さらに当時の軍隊生活というのは、今より苦しく、危険だったので、母親たちはとても心配をしていたような時代です。

母親が自分のことを心配して泣くことが分かっていたチャンユンさんは、そばにあった便箋を破り、短い手紙を書きました。

| お母さん、私は元気でやっています、チャンユン

現代のように電話やメールがなかった時代ですから、たった1行だけでも手書きの手紙で母親を安心させたかったのでしょう。チャンユンさんのお母さんはこの手紙を大事に保管していました。そして除隊後のチャンユンさんに渡され、彼は軍隊生活に関わるユニークな手紙として、私たちの「人間と記憶のアーカイブ」に寄贈してくださいました。この手紙が、私たちのアーカイブズの寄贈記録物、第一号です。

次は60年余り前、イム・チャンゼさんがアン・スンフンさんに送ったラブレターです

〈スライド6〉。私たちのアーカイブズを紹介する新聞記事に掲載されたこともあります。結婚を間近に控えた若者たちの切実な愛が感じられます。書体も素敵です。

実はこの手紙は、私の父が母に送った手紙です。母は恥ずかしいから捨てようとしたのですが、私がやっとの思いで確保して、第二号の記録物として寄贈しました。この熱い愛が結実して、今日の私が存在するのだと思います。ですから、私にとってこの手紙はただの手紙ではなく、特別な記録物なのです。

「日常コレクション」の中には、「5月12日の日記」シリーズというものがあります。「人間と記憶のアーカイブ」では、2013年から毎年5月12日の日常を記録した日記を収集しています。この収集を始めることになったきっかけをお話します。

イギリスのサセックス大学(University of Sussex)には、「Mass Observation Archive」というものがあります。70年余りにわたるイギリス人たちの日常生活を表す記録物が収集されています。1936年、イギリスの社会学者3人が「大衆観察」、すなわち「mass observation」を始めたといわれています。その結果がアーカイブズとして蓄積されました。一時は市場調査のように変質させられたこともあったようですが、1970年、サセックス大学にコレクションが移され、1981年から「大衆観察プロジェクト」が再開されました。2000年までの成果物が集められ、「Mass Observation Archive」となりました。若い映画監督やドキュメンタリー作家たちが、こちらにある過去の時代の記録からインスピレーションを得て、良い作品を作ったということもあります。また、授業教材として活用し、「ベストティーチャー」の賞を受けた教師もいるそうです。

2012年、明知大学校で開かれた国際学術大会に、このアーカイブズの担当者が発表者として参加しました。この担当者の方が後に、明知大学校に「5月12日の日記」収集イベントを共同で開催することを提案してくれました。5月12日は、1936年に初めて「大衆観察」が行われた日だそうです。この日を記念して、2011年から収集が始まりました。明知大学校も参加を表明し、2013年5月12日、初めて日記収集イベントを行いました。

これが2013年の日記提供を呼びかけるポスターです〈スライド8〉。オンラインで応募できるようにし、合計560件余りの日記が収集されました。収集した日記を分析した結果、よく出てくる言葉は次のようでした。

| 日曜日 アイアンマン3 二日酔い 外食

2013年5月12日はちょうど日曜日でした。映画を見に行っただけの方が多かったようです。特に「アイアンマン3」が面白かったという評価です。日本もそうでしたか? 「二日酔い……」、若者たちは前日の土曜の夜から朝まで熱く「走って」から、日曜日に寝坊し、二日酔いに苦労したという話が多かったです。韓国語では「走る」といいますが、日本語にもこういう表現はあるのでしょうか。「外食……」、5月

は「家庭の月」でもあるので、「母の日」「子供の日」などを理由に、家族で外食をしたという話も多かったです。高校生の誰かは、教会の中で「ジェントルマン」というミュージック・ビデオを撮影したといいます。皆さん、サイ(Psy)という韓国の歌手をご存じですか？ サイは「江南(カンナム)スタイル」に続き、「ジェントルマン」という曲で国際的なアーティストとして知られるようになりました。サイのミュージック・ビデオをパロディーするのが当時の流行でした。小学生はテレビを見て、思う存分食べて、遊んだという話が多かったし、幼稚園児の絵日記を見ると派手なカラーで、幸せな日常をうかがうことができました。

次に、「明知大コレクション」の中の授業記録物シリーズを紹介します。2013年の1学期初めに各授業科目の受講学生から一人を「アーキビスト」に選び、その学生が中心になって授業内容をアーカイブングすることにしました。

なぜアーカイブングをするのか？ /何をアーカイブングするのか？ /その記録物は誰がどのように利用することになるのか？

このような理由については、何も説明しませんでした。学生たちが自らドキュメンテーション戦略を組み、悩むようにしました。2013年2学期、2014年1学期まで、現在3学期目まで進行中です。今後も毎学期行う予定です。2013年1学期のみで11科目、総計3千件余りの記録物が収集されました。講義計画書、授業の発表資料、報告書、写真、受講生のインタビュー、講義の録音、試験問題など、さまざまな記録物が収集されています。

次に「記録人コレクション」を紹介します。キム・イッカン教授、イ・ヘヨン教授、そして私やファン・チンヒョン研究員などが、個人的に意味があると思う記録物を寄贈しました。今後も継続して寄贈を受けて行く予定です。

実は今年の3月、「人間と記憶のアーカイブ」にアーキビスト3名を採用しました。記録物収集を戦略的に実行していく計画だったからです。

ところが、アーカイブング計画を立てている最中に、あの4月16日の「セウォル(SEWOL)号事故」が起きました。3週間ほど戦々恐々としていた私たちアーカイブ・チームは、居ても立っても居られなくなり、「セウォル号アーカイブ」構築作業に挑むことにしました。したがって現在、「人間と記憶のアーカイブ」のすべての活動は中断状態です。私たちのアーカイブ・チームの人員すべては、「セウォル号アーカイブ」構築作業に「200%」投入されています。なぜ、「200%」でしょうか？ 5月13日以降、朝から晩まで週末の休日もないまま、キム・イッカン教授と私、そして5人の常勤研究員たちを総動員して働き続けているからです。

実物記録を保管するための臨時書庫も用意しました。予算がないため、既存の空間を活用する事になりました。使用した部屋は明知大学校記録情報科学専門大学院の院長室です。あのキム・イッカン院長の部屋ですね。ここを臨時に占拠する事にしました(笑)。書棚にあった学会誌は、全部処分しました(笑)。書棚をいくつか用意して臨時の収蔵庫を作りました。

「人間と記憶のアーカイブ」は大学院の授業に積極的に活用されています。キム・イッカン教授が担当する「日常アーカイブ実行演習」の授業や、私が担当する「上級記録物管理プロジェクト実習」では、日常におけるアーカイブのテーマを決めて収集企画書を作り、直接100件以上の記録物を生産あるいは収集することを進めています。記録物は学生たちが「AtoM」システムに直接登録して記述します。イ・ヘヨン教授が担当する「記録分類記述論」の授業では、「5月12日の日記」シリーズと「記録人寄贈記録物」「授業アーカイブ記録物」を分類して記述する実習をします。私が担当している「電子オブジェクト管理論」の授業や、イ・ヨンチャン教授が担当する「記録情報システムパッケージ研究」の授業では、学生たちが直接「AtoM」のソフトウェアをインストールし、自ら使ってみた後、インストール過程と使用してみた感想について報告書を提出させています。

実は「人間と記憶のアーカイブ」を設立する際に、2つの目的を設定しました。第一の目的は、公共記録物中心から脱却し、日常を記録する方向へと実践領域の重心を移そうとしたことでした。これまで研究者たちは、公共記録物管理に重点を置いてさまざまな研究と実践を行ってきました。おかげで、法制やシステム、記録物管理専門職員の配置など、たいへん大きな成果を挙げたと言えます。

しかし、これからは権力によって残される記録から作られる一方的な歴史ではなく、一般の人々の生活記録に基づいて、バランスの良い歴史を作っていく時代だという意識が広がりました。韓国では日常のアーカイブズを研究し、コミュニティ・アーカイブズに身を投じる研究者たちが増えています。私たち明知大学校と社団法人・韓国国家記録研究院もこのような流れに積極的に参加しようと、「人間と記憶のアーカイブ」を設立することになったのです。

第二の目的は、明知大学校の大学院の学生たちが実習として直接やっていくことのできるアーカイブズが必要だったということです。大学院で理論だけを身につけても、現場で専門家としての役割を果たすことは難しいです。したがって、大学院の課程の中でさまざまな実務を経験できるようにアーカイブズを構築したのです。授業科目とアーカイブズを緊密に結合する方向でこの目的を達成しています。

ここからは、「人間と記憶のアーカイブ」の記録システムについて紹介します。記録システムを構築する際に2つの原則を立てました。まず一つ目は、オープンソースソフトウェアを中心とするということです。二つ目は、システム構築の経験をアーカイブズ・コミュニティと共有するということです。一つ目の原則に従って、ホームページは「WordPress」というオープンソースソフトウェアを利用して構築しました。記録物管理のためのメインのソフトウェアとして「AtoM」を、記録物保存のために「Archivematica」を、そしてオンライン展示のために「Omeka」を採用しました。「人間と記憶のアーカイブ」は2014年4月、ICAの「AtoM」サイトに公式利用者として登録し、韓国で「AtoM」システムを導入した初めての事例

となりました。

ホームページをご覧ください(<http://www.hmarchives.com>)〈スライド 12〉。アーカイブメニューを選択すると「AtoM」に接続され、オンライン展示館メニューを選択すると「Omeka」へ接続されます。

まず「AtoM」へ接続してみましょう。メニューにある「所蔵記録物情報」をクリックしてみると、「5月12日の日記」コレクションが最初に見えます。次に「個人寄贈コレクション」があります。「5月12日の日記」コレクションをクリックしてみると、コレクションレベルの記述情報が表示されます。コンテキスト・エリアでは前に説明した内容、すなわちイギリスのサセックス大学と共同イベントを開催した際に始まったコレクションであることが記されています。パブリケーション・ノートには、日記寄贈者から公開許可を得ているものだけを公開していることを明記しています。

「個人寄贈コレクション」をクリックしてみましょう。「イム・ジンヒ」というフォンドが見えます。その下に「家族記録シリーズ」があり、「両親に関するファイル」があります。ここには先ほど紹介した私の父から母に宛てたラブレターだけがあるわけではありません。父が70歳の時、友達と遊んで家に帰って来なかった際に、母に怒られて書いた反省文も2枚あります(笑)。とても面白い一方で、私にとっては大切な思い出を呼び起こす記録です。

次は「デジタル記録物」のメニューをクリックしてみましょう。現在「AtoM」システムに登録、記述されているデジタル・オブジェクトが見えます。

次は「オンライン展示館」です(<http://omeka.hmarchives.com>)〈スライド 14〉。こちらは「Omeka」というオープンソース・ソフトウェアで作ったサイトです。現在「5月12日の日記」が展示してあります。「成長日記」「特別な日曜日」「両親の愛」など、テーマ別に展示されています。「成長日記」というテーマは、特徴的なイメージを大きく配置したレイアウトとなっています。「特別な日曜日」は、すべてが同じ大きさのサムネイルの画像を配置したレイアウトです。「Omeka」では、10種類のレイアウトを提供しています。一つのテーマを構築する際に、記録物の特性を考慮して適切なレイアウトを選択することが出来ます。「両親の愛」というテーマには、音声の記録物もあります。これは、ある娘が80歳の母親に電話をし、5月12日の出来事について話した内容を記録したものです。その隣には娘の日記があります。このふたつの記録物をつなげてみれば、異なる世代の二人の女性の人生、そして独特な親子関係を読み解くことができます。実は、こちらの80歳の女性は私の母親で、この娘の日記というのは私のものです。

それでは、二つ目の原則をどのように実践したかについてお話したいと思います。システム構築の経験をアーカイブズ・コミュニティと共有することが、私たちの原則だと申し上げました。「人間と記憶のアーカイブ」は、まずチャレンジしてみて成功したことを韓国の小規模ながら多様な民間アーカイブズと共有するという趣旨で設立されました。特に、記録システムの場合、経験の共有、ノウハウの共有

が必要です。私はコンピュータ工学を専攻しているので、様々なアーカイブズから質問を受けることがあります。記録システムをどのように構築すればよいかということについてです。そういった質問を受ける度に、私はとても悩みました。システム構築には相当な費用がかかるため、小規模のアーカイブズでは十分な費用を捻出することができません。また、構築後にもメンテナンスに相当のコストが必要になります。また、アーキビストは記録システムが必要であると言いつつも、どのような機能が、どうやって実行されればよいかを具体的に示すことができないのが一般的な状況でした。

4 — オープンソース・ソフトウェア記録システムの普及活動

2011年から朴元淳(パクウォンスン)、ソウル市長は革新市政の一つとして「マウル(町)づくり」事業を積極的に推進しています。現代化した巨大都市のソウルで「マウル」という共同体を復元する事業です。要するに「人間臭い都市」として、ソウルをリモデリングするため、過去の「マウル」を甦らせるということです。

キム・イッカン教授は、「マウルづくり」事業の軸として、「マウル・アーカイブ」の構築を提案しました。韓国アーカイブズ界のさまざまな専門家たちが、木洞(モクドン)、貞陵(チョンルン)、三角山(サムカクサン)など、多くの町でアーカイブズ構築のコンサルティングを行っています。「マウル・アーカイブ・プログラム」を進めて、多くの記録が集まりましたが、そこで集まった記録をどのように管理し、共有するかという問題に直面しました。そのため、私が記録システムの構築に関する問題に対応することになり、その答えを出さなければなりません。私が悩んだ末に出した答えが、オープンソース・ソフトウェアを利用して記録システムを構築するというものでした。PC級のサーバー 1台さえあれば構築可能な記録システム、100万ウォンあれば構築可能な記録システムが「マウル・アーカイブ」には適切だと判断しました。そこで「AtoM」の検討に着手しました。「AtoM」が記録管理に必要な機能を十分備えているのかを、まず確認しなければなりません。そこでまず「人間と記憶のアーカイブ」に適応してみれば、使えるかどうかの判断ができるだろうと考えたのです。実際に利用してみてさまざまな問題が発生しましたが、解決策も見つけることができました。ノウハウが徐々に蓄積され、多くのアーカイブズと協力しながらこのシステムを発展させていけるのではないかという可能性も感じました。「人間と記憶のアーカイブ」は「AtoM」でのシステム構築に成功し、フォーラムサイトも運営しています(<http://osaf.net>)。フォーラムサイトは、オープンソース・ソフトウェアを利用して記録システムを構築する人達のための意見交換の場です。

現在では主に、「AtoM」「Archivematica」「Omeka」の3つに関する各種の技術的資料を共有し、意見交換が行われています。「AtoM」を紹介した講義

の動画もアップしています。このフォーラムは、アーカイブズ・コミュニティの積極的な共有と協力が行われている空間なのです。このフォーラムを通じて「AtoM」のハンゲル化も完了することが出来ました。「AtoM」には記録物を記述するためのフィールドが画面に表示されます。該当フィールドにどのような内容を入力するのかという指示も出ます。ISAD(G)、ISAAR(CPF)など、記録記述の標準です。

しかし、「マウル・アーカイブ」で例えば70歳のお年寄りが記録物を登録しようとしても、フィールド名や解説が英語だけでは利用することが出来ません。民間アーカイブズのオープンソース・ソフトウェアを普及するために、ハンゲル化は必須でした。2013年の段階で「AtoM」のハンゲルへの翻訳割合は14%にすぎませんでした。一方、日本語翻訳の割合は48%にも達していました。そこで私たちはフォーラムで、ハンゲル化作業を手伝ってくれるボランティアを募集しました。学生や大学の教授たちがたくさん参加してくれました。その結果、今年の4月末にはハンゲル化を完了させることができました。ハンゲルが搭載された「AtoM」がリリースされたのです。しかし、残念ながら私たちはまだその新しいバージョンをインストールすることができていません。それは「セウォル号事故」のために、すべての作業が中止された状態だからです。

先ほど述べた二つ目の原則、経験やノウハウの共有のために、ホスティング・サービスも計画しました。一人でサーバーを準備し、ソフトウェアをインストールするのは大変です。そうした負担を感じる利用者たちのために、10個の「AtoM」をインストールしてサービスしています。月3万ウォンという安い費用で利用することができます。とても親切ですよ(笑)。

ICAの「AtoM」もホスティング・サービスを提供しています。しかし最も安い場合でも、1年に約1,500ドル程度の料金がかかります。私たちはより安く、ハンゲルバージョンで提供しています。単にシステムだけを提供しているわけではありません。記録物を登録し、記述するプロセスについてコンサルティングも行っています。さまざまなアーカイブズでのすべての経験を、フォーラムへ投稿するように呼びかけています。他の民間アーカイブズの参考にするためです。このような活動を3年くらい続けていけば、韓国の民間アーカイブズはとて活性化するのではないかと期待しています。

ここでまとめますと、「人間と記憶のアーカイブ」は、「AtoM」「Archivematica」「Omeka」「WordPress」などのオープンソース・ソフトウェアを連携させてシステムを構築したと言えます。「AtoM」は記述のため、「Archivematica」は長期保存のため、「Omeka」は展示のために利用し、この3つのプログラムがうまく連携できるようにしていく予定です。2013年の2学期には「AtoM」を韓国の記録学会で紹介しました。2014年の1学期には「Omeka」を取り上げ、2014年の2学期には「Archivematica」について検討し、紹介する予定です。

公共機関の記録物管理システムは国家記録院が開発し、各機関へ無料で

3. AtOM 構築事例 —— 「人間と記憶のアーカイブ」 (hmarchives.com)

・ ホームページとアーカイブシステムの構築内容

hmarchives.com		アーカイブシステム
メイン機能	アーカイブ紹介、お知らせ提供、オンライン展示	記録物記述/閲覧、保存、ウェブパブリッシング
基礎システム	World Press	AtOM, Archivematica, Omeka
主要機能	1. アーカイブ紹介 2. 寄附案内 3. 参加広場(お知らせ、市民アンケート、FAQ) 4. オンライン展示 5. アーカイブ(アーカイブシステムリンク)	AtOM 1. 記述 (ISAD(G), ISSAR(C/P), ISDIAH, ISDF) 2. 登録 (メタデータ、写真、ビデオ等のデジタルオブジェクト) 3. 検索/アプリケーション/閲覧 4. アーカイブ運営(入札記述、寄附者、番書管理) 5. 管理者機能(アクセス権限、言語、セキュリティ管理)
主なユーザグループ	一般利用者	寄附者、大学院生/教授、市民アーキビスト、観覧者、一般人

10

スライド

11

4. オープンソース・ソフトウェア記録システムの普及活動 (Osasf.net)

10

スライド

16

3. AtOM 構築事例 —— 「人間と記憶のアーカイブ」 (hmarchives.com)

・ 「人間と記憶のアーカイブ」ホームページ hmarchives.com

10

12

5. 「セウォル号アーカイブ」の構築過程

・ 2014年4月16日 セウォル号沈没事故で、乗客476名のうち302名が犠牲に
 ・ 大元学園高校の学生325名のうち、生存は75名のみ

10

17

3. AtOM 構築事例 —— 「人間と記憶のアーカイブ」 (hmarchives.com)

・ アーカイブ目録記述 atom.hmarchives.com

10

13

5. 「セウォル号アーカイブ」の構築過程

・ 行方不明者の無事帰還を祈る「黄色いリボン」キャンペーン

10

18

3. AtOM 構築事例 —— 「人間と記憶のアーカイブ」 (hmarchives.com)

・ アーカイブオンライン展示 omeka.hmarchives.com

10

14

5. 「セウォル号アーカイブ」の構築過程

・ 「セウォル号を忘れない市民ネットワーク」 SNS : facebook, twitter, band

10

19

4. オープンソース・ソフトウェア記録システムの普及活動 (Osasf.net)

10

15

5. 「セウォル号アーカイブ」の構築過程

・ 「セウォル号を忘れない市民ネットワーク」ホームページ sewolho-archives.org

10

20

配布しています。しかし、システムのソースコードやデータベースの構造などは公開していません。私たちのような研究者にも公開されていません。ですから、公共機関に所属する記録物管理専門職員がシステムを使用しながら直面している諸問題について、外部にいる私には分析しようがありません。このような閉鎖性について問題を感じます。国家記録院が公共記録物の管理ソフトウェアをオープンソースに転換することを、今後強く訴えていきたいと考えています。

ここまでは、韓国の民間アーカイブズの活性化、つまり記録文化の普及のためのオープンソースソフトウェアを利用した、記録システムの普及事例についてお話をさせていただきました。

5 —— 「セウォル号アーカイブ」の構築過程

ここからは、現在取り組んでいる「セウォル号アーカイブ」の構築作業について、現況を報告させていただきたいと思います。あまりにホットな問題のため、私を含む多くの韓国の記録管理に携わる者たちが参加している事業です。また、この事業でもオープンソースソフトウェアを採用しているので、紹介させていただきたいと思います。

まず、旅客船セウォル号沈没事故について簡単に紹介します。セウォル号の沈没事故は、2014年4月16日午前8時48分頃、韓国・全羅南道珍島(チョルナムド・チンド)付近の黄海上で、仁川発済州島行の国内線旅客船が起こした沈没事故です。セウォル号には、修学旅行で済州島へ向かっていた檀園(タンウォン)高等学校2年生ほかの乗客と乗組員30名、合計476名が乗船していたと言われています。事故が起きた当日に救助された172名の生存者以外は一人も救助することができなかったという点で、とても衝撃的な事故と言えます。また、多くの国民がテレビの生放送を通じて数百名の人間が命を落とす過程を目撃したという点で、人々の心に深い傷跡を残しました。事故の原因については、海洋官僚と船舶業者の癒着、管理監督機関の不適切な談合、新自由主義的な規制緩和、セウォル号を運行していた海運会社の違法な利益追求、船長をはじめとする乗組員の無責任な行動、「動かないでください」という誤った指示に従った学生など、さまざまな問題点が指摘されています。

本日、2014年6月21日現在も、この事故は終わっていません。未だ12名の行方不明者を捜索中だからです。犠牲者の家族が長期間、珍島に滞在している間、全国各地から約3万人のボランティアが現地を訪れ、食事や医薬品、生活用品を提供し、掃除や洗濯などさまざまな支援を行いました。なかなか進まない救助に不信を募らせた犠牲者の家族たちは、大統領に面会を要求し、街頭で抗議活動を行って警察に阻止されるという場面もありました。京機道安山(キョンギド・

アンサン)市のタンウォン高等学校2年生で乗船した325人のうち、救助されたのはたったの75名だけでした。2年生全体で10クラスありましたが、生存者がわずか1、2名しかいなかったクラスもあります。

事故が起きた後、不適切なメディアの報道姿勢が浮き彫りとなり、大きな問題となりました。これに対して怒りを覚えた犠牲者の家族たちは、主要メディアの取材を拒否し、市民メディア、独立メディアといった「もう一つのメディア」(オルタナティブ・メディア)だけを信頼するような状況まで起こりました。「動かないでください」という、誤った案内放送に従ったことにより多くの犠牲者が出たことに抗議する意味を込めて、「動かねばなりません」というスローガンを掲げたデモ隊も出現しました。その一方で、学校や家庭での青少年教育に問題があるといったことまでもが議論されました。日常生活に戻らなければならない遺族、未だ遺体が見つからない家族たちは、この事故が徐々に忘れ去られてしまうことを恐れ、悲しみ、自殺を図るといったことも起きました。こうしたことから、「忘れません」というメッセージを込めたキャンドル集会(約束の集い)も行われました。また、セウォル号事故が、朴槿恵(パク・クネ)政権の規制緩和、公共サービスの民営化、非正規職を大量に産み出す労働政策などの諸問題を総合的に示していると、政府の政策に対する抗議デモも増加しました。

そして、行方不明者の無事帰還を祈る意味が込められた、「黄色いリボンキャンペーン」が始まりました(スライド18,19)。特にSNSのプロフィール写真を黄色いリボンに変えるという運動が、急速に拡散されました。「KakaoTalk」や「Facebook」といったSNSに、多くの黄色いリボンが登場しました。今私が着ているこの服にも、黄色いリボンを付けています。

韓国の記録管理界も何もせずにはいられていませんでした。今後事故についての徹底的な真相究明が必要ですが、そのためには事故の責任をもつ機関の記録がきちんと残っていないと成りません。しかし、すでに真相究明に必要な多くの対象機関の記録が無断で廃棄され、もしくは破壊される事態が発生し始めました。そのため、2014年5月12日、記録管理団体協議会は記録の無断廃棄の禁止、および事故関連記録の即時公開を求める緊急声明を発表しました。そしてセウォル号事故に対する、記録管理界のより積極的な介入が必要だという認識が広まりました。

事故発生から28日目、行方不明者27名を残した時点の2014年5月13日、社団法人・韓国国家記録研究院のキム・イッカン院長をはじめ、私と研究員たちは珍島の事故現場に初めて向かいました。到着した当日に珍島に滞在することを決め、テントを張り、記録収集活動を始めました。以後、明知大学校記録情報専門大学院の学生や、その他の大学教員、学生たちが交代で珍島に出向き、活動を続けています。ソウルから珍島までは約6時間かかります。

私たちアーカイブ・チームは、珍島の現場でボランティアを続けてきた人たち約

30名に会い、現地での活動経験について聞き取りを行いました。活動日誌や写真など約1千点にのぼる記録の寄贈も受けました。全国各地に作られた追悼所には、多くの市民が記した手紙と黄色いリボンが寄せられました。そして、私たちは「セウォル号事故記録保存ボランティア」を結成し、記録保存のための活動を始めました。

アーカイブ・チームによるさまざまな活動がメディアで紹介され、多くの団体や個人から記録保存活動に対する支持と声援をいただきました。記録を保存することは記憶を維持するために必須であるという点に、皆が共感しました。『ハンギョレ新聞』は私たちのチームに、「セウォル号記録収集キャンペーン」を一緒に実施すると申し出てくれました。アルムダウン(美しい)財団は支援金を提供してくれました。財団の支援を受け、私たちのチームは「セウォル号アーカイブ・システム」を開発し、事故の被害者を多く出したタンウォン高等学校があるアンサン市に、「セウォル号アーカイブ」の空間を設けています。記録保存について意志を共にするさまざまな団体と個人が集まり、「セウォル号を忘れない市民ネットワーク」を発足させました。これが6月5日のことです。

6月9日にはホームページが試験開設されました(<http://sewolho-archives.org>)〈スライド20〉。これも「WordPress」で開発しました。このトップページの文字は申栄福(シン・ヨンボク)先生が書いてくださいました。先生はスパイ疑惑で長い間投獄され、10年ほど前に社会に復帰した方です。ネットワークの紹介文は、次の通りです。

「セウォル号を忘れない市民ネットワーク」は、セウォル号の事故と関連するすべての記録を収集し、保管し、整理する市民記録団体です。全国の市民と専門家が自発的に集まり、私たちの社会がセウォル号の事故に関する記憶を維持できるよう、事故の記憶と記録を収集・整理し、共有する活動を展開します。

ネットワークでは「Facebook」「Twitter」「BAND」などのチャンネルを利用し、コミュニケーションをとり、協力合っています。「セウォル号アーカイブ」は、デジタル・アーカイブと収蔵庫および展示空間で構成されています。この中でデジタル・アーカイブは「DSpace」というオープンソース・ソフトウェアを利用して構築しています(<http://14.63.171.146:8080/>)。「DSpace」は、研究資料を登録し共有するために開発されたオープンソース・ソフトウェアです。韓国でもソウル大学など10数カ所の機関ですでに構築実績があるシステムです。現在、「DSpace」での構築経験を持つ開発チームと共同で「セウォル号アーカイブ」を構築中です。収蔵庫と展示空間は、アンサン市古棧洞(コジャンドン)という場所に事務室を借りています。ある建築家の方がボランティアで設計してくださいました。

このように「セウォル号アーカイブ」はアーカイブ・チームから提案されたもので



すが、現在ではさまざまな人々の力で構築している最中です。このアーカイブズには、「真相究明記録」「犠牲者記録」「市民追悼記録」が集まる予定です。私が日本に来てから決まったことですが、来週の月曜日、6月23日から「セウォル号記録収集キャンペーン」が始まります。

すでにワールドカップが始まり、インターネット上ではセウォル号の事故をただの「交通事故」として扱おうとする意見が出てきています。いわゆる、記憶を忘却と偽りで塗り固めようとする動きが始まったのです。それではこのような状況の中で、私たち「セウォル号アーカイブ」は何をすべきでしょうか？ その存在意義はどこにあるのでしょうか？ 私たちチームは信じます。「忘却」と「記憶」の対決構図の中で、アーカイブズだけが真実を確認し、記憶できるようにする役割を果たせると。

おわりに

現在進行中のセウォル号事故に、私たちアーカイブ・チームが加わりました。社団法人・韓国国家記録研究院の職員5名はこの1カ月半の間、「セウォル号アーカイブ」の仕事だけをしてきました。キム・イッカン教授は3週間、珍島の現場を守ってくれました。多くの大学院生、教授たちが何度も珍島まで足を運びました。私たちの活動の結果、韓国では記録保存の重要性についての共感が広まり、これからの私たちに多くの期待が寄せられています。この先1年かかるか5年かかるかわかりませんが、「セウォル号アーカイブ」の事業について、日本のアーカイブズ学関係者のみなさんにも大きな関心を持っていただければ幸いです。

セウォル号の犠牲者たちのご冥福を心からお祈りしつつ、以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



〔補記〕

任眞嬉先生は学習院大学客員研究員として、2014年6月16日より6月29日まで日本に滞在された。その間、2回の特別講義(6月19日、6月27日)と今回の講演会を実施した。また、「セウォル号アーカイブ」への有志寄附金を当日の会場および学習院大学文学部で呼びかけたところ、合計254,500円と64,730ウォンの募金が集まり、帰国前先生にお渡した。募金くださった方々に、この場を借りて心よりお礼申し上げる。